

(一社) 東洋音楽学会 西日本支部だより

Newsletter of the West Japan Chapter, Society for Research in Asiatic Music

第93号 2021年(令和3年)2月10日発行

— 定例研究会のご案内 —

東洋音楽学会西日本支部 第288回定例研究会

日時: 2021年3月6日(土) 14:00~16:00

場所: オンライン開催

参加方法: 事前申込制。西日本支部ウェブサイト (<http://tog.a.la9.jp/nishi/index.html>) に掲載した「申込先」より参加フォームに入力して参加をお申し込みください。申し込まれた方には、参加のための詳細情報を追って電子メールでご連絡いたします。

例会担当: 岡田 恵美 (国立民族学博物館)

○研究発表1

インド北東部ナガランド州の歌唱文化にみる特殊性

—なぜポリフォニーなのか?—

岡田 恵美 (国立民族学博物館)

○研究発表2

「ワールド・ミュージック」のなかのインドネシア音楽

—日本の音楽評論家たちの言説空間—

金 悠進 (国立民族学博物館)

定例研究会の記録

東洋音楽学会西日本支部 第286回定例研究会

日 時：2020年8月23日（日）14:00～16:00

場 所：オンライン開催

例会担当：福岡 正太（国立民族学博物館）

○書評会

柳沢英輔著『ベトナムの大地にゴングが響く』（灯光舎、2019年）（第37回田邊尚雄賞受賞）

コメンテーター：柳沢 英輔（同志社大学）

〈報告〉

今回の定例研究会では第37回田邊尚雄賞受賞作である柳沢氏の著作の書評会が行われた。事前のML上でコメントや質問、それに対する著者の応答と書籍の内容紹介、発表に基づく質疑応答という手順で行われた。多くの重要な議論がなされ、著者は丁寧にそれぞれに応答したが、ここでは紙面の都合上、以下の点を中心に報告する。

①ゴング文化の捉え方：柳沢氏からは、ベトナム中部高原の人々のゴングをめぐる知識、わざ、信仰、行動、表現などの総体を捉える、特に表現としての演奏について知ることを目指した点が強調された。演奏、そして演奏に不可欠なゴングの製造、調律、流通などの詳細を調べていくうちに、民族毎の特徴の総体としてゴング文化があるだけでなく、民族内での違い、他民族との演奏形態の類似、地域を越えた楽器の売買や共有などの実体が明らかになった。さらに中部高原の少数民族が受け継ぐ独自の文化としての従来の位置づけに対しても、ゴングの製作・販売や儀礼などへのキン族の参与、また中部高原外での同様の文化の存在なども示された。そして今後の課題としてゴングを取り巻く実践の多様性や共通性を明らかにしていく方向性が示された。

②音響スペクトル分析について：柳沢氏からは、周波数スペクトルのソフトウェア解析を通して、ゴングの部分音の周波数、音圧レベルを分析した経緯が説明された。これに関して音色の分析に時間的経過の要素が重要であるという指摘、またゴングによってうなりの差異が見られる点、などが提示され、今後の分析のさらなる方向性が示唆された。また音響分析と調律師の言語表現との相関関係については、調律師の言語化する表現に着目した追跡調査の方向性が示された。

③書籍の参照資料として映像を共有する意義：柳沢氏からは書籍の参照資料として映像資料を共有する意義とともに、現地の人々を含む一般社会の人々との共有の

可能性、また人々との対話のプラットフォームの構築についての見解が提示された。さらに現在進行中のプロジェクトである「ゴング文化のマルチメディア資料のデータベース化と共有化」についての展望が述べられた。

その他、現地のメディア状況、演奏者の音楽認識、歌謡とゴングの関連、カンボジア・ラオスにおけるゴング演奏との比較、調律師の現状などの諸点について議論された。

以上、モノとしてのゴングに向き合う姿勢の重要性、音響分析の可能性、メディアを活用した研究成果の共有の方向性などが示された興味深い研究会となった。

(福岡 まどか 記)

東洋音楽学会西日本支部 第287回定例研究会

日 時：2020年10月11日(日) 14:00～16:30

場 所：オンライン開催

例会担当：福岡 正太(国立民族学博物館)

○研究発表

民族音楽学における習得の意義 —musicality をめぐる議論に焦点を当てて—

小島 冨月(大阪大学)

(報告)

本発表では、民族音楽学における研究者自身の実技習得の意義を考察するため、その前提となるマントル・フッド Mantle Hood の bi-musicality の概念について、関連する二つの研究を用いた再検討が行われた。

民族音楽学においては、研究者自身が研究対象の音楽を習得することは当然のことと考えられてきた。しかし、確かに、その意義や、長らく大前提とされてきた bi-musicality について再検討されることはあまりなかったように思う。その点で、現在ジャワで現地調査を行う傍ら、日々実技習得に励んでいる筆者にとっても、重要な視点を示した研究発表であった。

ここで、発表内容を要約する。ここでは、フッドの bi-musicality に対し、音楽性について考察したベイリー Baily とハドン Haddon による二つの研究を引用し、比較、検討がなされた。フッドは1960年に bi-musicality を提唱し、音楽性は音楽家にとって本質的なものであり、非西洋の音楽実践を通して bi-musicality を身につけてゆくことには様々なチャレンジが伴うということを示した。それをふまえ、実技習得を learning to perform とし、研究手法の一つとして位置付けたベイリーは、実技習得を行うことで実際に身につけているのは音楽性ではなく、音楽能力であるとし、intermusability という用語を提唱した。さらに、二つの音楽能力ある

いは音楽性の関係性を捉えるために、発表者はハドンの研究を引用した。この研究は、西洋音楽とガムランを学ぶ学生を対象に質的調査を行い、両方の経験が音楽性に及ぼす影響について明らかにしたものである。ハドンは **dialogical-musicality** という概念を提示し、二つの音楽性の相互関係を強調した。発表者はこれらの研究の共通点と相違点から、音楽性には様々な議論があり、音楽性は習得により増やしていけるものというよりも、音楽性は個人が持つ可能性であり、相互に影響し合うものであるとした。その上で、今後は研究者自身の習得の意義や、演奏技術の他に、社会と音楽の関係も踏まえた広い意味での音楽性について人類学の枠組みも援用し考察したいと述べた。

質疑応答では、発表者が舞踊の実技習得を行っていることから、複数の舞踊を習得することについての人類学的研究をめぐる質問や、音楽家の社会的な地位と音楽性や音楽能力の関係についての考察はあるかといった質問がなされた。発表者は、これらについて今後考察を進めていきたいと述べた。その後、複数の質問者によるコメントから、舞踊研究の視点が、**bi-musicality** の研究に敷衍できる可能性があること、さらに、発表者の研究は、音楽の要素と、人類学における身体技法や舞踊の習得に必要な能力を関連づけた研究へと発展できるということが示唆された。

こうした議論から、筆者は、この発表は発表者の関心である研究者の習得の意義だけでなく、音楽学を越えて、舞踊や人類学等様々な分野へ広がりうる将来性のある研究であると感じた。今後のさらなる進展に期待したい。 (岸 美咲 記)

○修士論文発表

セネガル・スーフィー教団の「ズィクル」をめぐる民族誌 ―音楽的实践から見るイスラーム―

星野 佐和 (京都大学大学院)

(要旨)

「ズィクル」とは、神の名に旋律をつけてひたすら唱えるイスラームの中心的な修行であり、特に神秘主義といわれるスーフィー教団においては、いわゆるトランスのような強い身体動作が引き起こされることがある。発表者の調査地である西アフリカ・セネガル共和国においては、複数のスーフィー教団が認められ、教団ごとに異なるズィクルが、街中などで日常的に行われる。

本発表では、セネガルのスーフィー教団の一つであるニアセン教団を対象に、ズィクルの音楽的構造を明らかにし、その音楽的構造と信徒らの身体動作、宗教歌手の技法との関連を明らかにすることを主な目的とした。

発表者が行った調査において、ズィクルが行なわれる場として金曜礼拝と宗教集會が挙げられる。これらはともに宗教指導者を中心とした地域的な紐帯が基礎となり、近隣に住む顔なじみの信徒らが参集して行われるが、二つの場におけるズィク

ルは異なる音楽的特徴を有している。金曜礼拝のズィクルは旋律や朗唱内容が単一で、リズムもほぼ一定であるのに対し、宗教集会のズィクルは旋律、朗唱内容、リズムも多様であり、爆音で深いリバーブを駆使した独特の音響空間が作り出される。また、宗教集会のズィクルは、宗教歌手が先導するコールアンドレスポンス形式のズィクルから、複数の宗教歌手の掛け合い、宗教歌手の独唱へと進行していることが明らかになった。さらに、こうしたズィクルの進行と、信徒らの身体動作の関連を見ると、叫ぶ、卒倒するなどのトランスとみられる身体動作は、宗教歌手の独唱の部分においてのみ見られることが明らかになった。最も強いトランスが起きたのは、ある宗教歌手の死後の法要の事例であった。即興で朗唱をした宗教歌手が、亡くなった宗教歌手の名前を即興的に取り入れ、声に激しくダイナミクスをつけて朗唱した箇所で、近親の信徒らが泣き叫び、卒倒した。

これらのことから、独唱部分における宗教歌手の技法がトランスと関連していること、またトランスに至る要因として、ズィクルという音楽的パフォーマンスの外で起きた具体的な出来事が関連していることが示唆された。

〈報告〉

正統派ムスリムのコラーン読誦などとは別に、何らかの肉体的行動を伴う修行を通じてアッラーの神との神秘的合一たる宗教的忘我の境地を目指すのがイスラーム神秘主義者(スーフイー)である。修行手段として音楽を用いるスーフイー教団には、旋回舞踊で知られるトルコのメヴレヴィー教団や、筆者がかつて修士論文のテーマとして取り組んだ集団歌謡カッターリーを用いた南アジアのチシュティー教団などがある。アッラーの御名を単純なメロディーをつけて反復し続けるズィクルもまた、スーフイーたちが広く行う宗教的修行ではあるが、「音楽」として扱うにはあまりにも素朴であり、どのように音楽学の研究対象たり得るのかと興味津々に傍聴に臨んだ。発表は、修士論文の第3～4章にあたる「音楽的構造と身体動作の関連性」「ズィクルの習得過程や宗教歌手の技法」にフォーカスされていた。

セネガルの人口の95%がムスリムでありその大半はいずれかのスーフイー教団に属するというが、本研究の観察対象である「ニアセン教団」の位置づけや、調査対象の宗教的指導者とその娘でズィクル(セネガルではスィカル)を主導する宗教歌手(スィカルカット)は共に女性であることの一般性・特殊性はよくわからなかった。しかし、発表からは、字義的な「ズィクル」の範疇をはるかに越えた、技巧的で旋律的な朗誦まで含むもの広い音楽行動であることが理解できた。時には「アッラー」とは無関係に創作された歌詞や、ポップ歌手との共演まで許容される。さらに、筆者が経験的にズィクルの音楽的必須条件と考えてきた「拍動(ビート)」までもがあまり感じられず、採譜は4分の7拍子だった。この点についての質問に対する回答は「太鼓伴奏などはなく指ならしなどで拍子をとることはある程度」ということであった。

筆者が研究対象としてきた「カッワーリー」「バジャン」「キールタン」にせよ、恐らく米山知子氏のアレヴィーの「セマー」にせよ、現実に生きる人々の宗教に関わるミュージッキングの実態は、その名の由来や本来の宗教的脈絡から自由に乖離してゆくことが、常に人の生と共にある音楽の必然だろう。だからこそ、こうしたフィールドからのホットな民族誌的報告が必要であり、一つ一つが貴重な情報であると思う。筆者がカッワーリー研究を断念したのは、ムスリム社会における女性研究者の限界を強く感じたからでもあったが、発表者も（米山氏も）女性であり、調査対象が「女性の宗教指導者、女性の宗教歌手」ということにも驚かされた。今回の発表範囲ではなかったが、修士論文の第5章「女性の声」をめぐる議論もいつか聞いてみたい。

(田中 多佳子 記)

○博士論文発表

セルビアのポピュラー音楽「ターボフォーク」における民族的アイデンティティの表出とその文化的実践

上畑 史 (大阪大学大学院)

(要旨)

本発表は、2020年3月に大阪大学大学院文学研究科に受理された、発表者の博士學位論文に基づく。バルカン半島の一国セルビアにおける民俗調ポピュラー音楽「ターボフォーク」を扱った同論文および本発表の目的は、ターボフォークの内容や受容において、同地の人々の一様でない民族的アイデンティティがどのように表出し、そのことがいかなる文化的・社会的意義をもつのかを解明することであった。本発表ではまず、ターボフォークの音楽・文化を概観し、同音楽・文化が以下の4点を理由として知識層から激しく批判されてきたことを説明した。①ターボフォークにおける芸術的・文化的価値の欠如、②ターボフォークの流行による他の芸術文化の衰退、③ターボフォークを「非セルビア的」音楽として認識させるオリエンタル(トルコ・アラブ的)な音楽内容、④逆にターボフォークに「セルビアらしさ」を付与する民族主義との結び付き。

続けて、社会主義崩壊を機に成立したターボフォークをめぐる言説が主として、社会主義期の文化政策や、社会主義体制下の知識層が民俗音楽に対して示したアンビバレントな解釈に依拠することを論じた。そして、ターボフォークが既存の文化観や文化的序列への脅威として受け止められたことを報告した。

これを踏まえ、ターボフォークが対抗文化的な側面をもつ音楽・文化であること、さらにこの側面が1990年代の国際的な孤立や2000年代から加速するグローバリゼーションを背景として、愛国的な性質を帯びたことを明らかにした。その上で、批判言説にみられる矛盾、民族や文化に関してターボフォークの担い手が示す寛容さ、そしてターボフォークの汎バルカン的な傾向を参照しながら、ターボフォーク

の愛国的性質が民族主義とは一致しないことを確認した。最終的に、ターボフォークがセルビアに限定されず、旧ユーゴ地域やバルカンの人々をもエンパワメントする機能を果たしていることを明らかにした。

〈報告〉

セルビアの国民的なポピュラー音楽でありながら、知識層に激しく批判されてきた「ターボフォーク」を、フィールドワークや言説の分析を通してその文化の実態や民族的アイデンティティとの相関を明らかにすることが論文の目的である。発表者はまず、ターボフォークが結婚式やナイトクラブなどで演奏され、身近なものとして親しまれている現状を述べ、次にメリスマ的な発声や増二度音程、バルカンやトルコに共通する民族楽器の使用など、ターボフォークが「民族調のポピュラー音楽」と捉えられることを確認した。

次に、発表者はターボフォークにまつわる批判の言説がセルビアにおける文化観と民族観の二つの問題に起因するものと捉え、批判の文化的背景について論じた。社会主義時代には、セルビア国営放送局が文化の「管理者」として民俗音楽を保護・発展させた。国営放送局は、1960年代以降に現れた民族調の大衆音楽である「新作曲民謡」に対して民俗芸術を歪曲していないか検閲を行い、課税、放送禁止措置を取った。社会主義時代後期に共産党が弱体化すると国営放送局の影響力は低下し、新作曲民謡やオリエンタルな大衆音楽が台頭していった。90年代以降になると民放局によってターボフォークが広く流通するようになるが、政治批判や社会批判をしない傾向にあったターボフォークは、知識層の文化観と対立する対抗文化的な側面があった。民族観の側面からは、非政治的であり民族紛争期にも敵対国での高い需要があったターボフォークは、民族的とは言い切れないが愛国的とは言えると発表者は述べた。更に、バルカン全体でターボフォークが共有されていることから、発表者はターボフォークを対抗文化的かつ愛国的な音楽であり、セルビア人や音楽的・文化的共通性を持つバルカン全体をエンパワメントする音楽文化であると結論付けた。

質疑応答では、「ポップフォーク」という用語の定義に関する質疑が行われた。これに対し発表者は、2000年代後半から加速度的に進展したバルカン全体での音楽の借用や共同作業が反映された用語であると述べた。メディアの発展が音楽に与えた影響についての質疑では、主要なメディアがラジオからテレビに移行したときに酒場風の衣装を身にまとう歌手が人気を得たことから、酒場音楽のリバイバルが起こったのではないかという議論に発展した。 (木村 颯 記)

お知らせ

◇第92号1頁に誤記がありました。訂正してお詫びいたします。

(誤)「第286回定例研究会」→ (正)「第287回定例研究会」

◇学会運営の省力化、デジタル化促進のため、メールアドレスの登録・変更を、学会事務所(東京、LEN03210@nifty.ne.jp)まで、必ずお知らせください。ご協力をお願いいたします。

◇研究発表の募集

西日本支部の定例研究会で研究発表を希望される方は、発表種別(研究発表、修士論文・博士論文発表、報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、氏名、所属機関、連絡先(E-mail等)を明記の上、下記の西日本支部事務局までお申し込みください。

◇新型コロナ禍のため、当面の定例研究会はオンラインで開催する予定です。オンラインを活用した支部企画、ご意見ご要望をお寄せください。最新の情報は随時、支部ウェブサイトに掲載いたしますので、ご留意ください。

◇今号より、支部役員と支部事務局が交代しました。何卒よろしくお願いいいたします。

支部担当理事：竹内有一(支部長)、田中多佳子、福岡正太、藤田隆則

支部委員：明木茂夫、岡田恵美、梶丸岳、神野知恵、菌田郁、柳沢英輔

参事：上畑史、古澤瑞希、細野桜子、吉岡倫裕

(竹内 有一 記)

編集・発行：(一社) 東洋音楽学会 西日本支部

〒610-1197 京都市西京区大枝沓掛町13-6

京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 竹内有一研究室気付

東洋音楽学会 西日本支部事務局

TEL 075-334-2395 FAX 020-4623-4554 E-mail ytake2395@gmail.com

<http://tog.a.la9.jp/nishi/index.html>